氏　　名	**水谷　隆**
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	第 ６１６５号
授 与 報 告 番 号	(乙)第 ２７７０号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項
学 位 論 文 名	**紀貫之の文芸に関する研究**
論 文 審 査 委 員	主　査　　教授　村田　正博　　副　査　　教授　小林　直樹 副　査　　教授　松浦　恆雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本文学史上に大きな足跡を残す紀貫之の文芸について、その表現をあたう限り精密に読み解くことで、彼の文芸創作の方法および理念を明らかにすることを企図したものである。

第一部では、貫之が万葉歌と漢詩文の表現に取材して、そこから和歌表現に用いるためのさまざまな文芸的イメージを創り上げ、蓄積していたこと。また、屏風歌の制作や歌合の場などで歌が求められた際に、それら蓄積していた文芸的イメージのうちから詠むべき主題に適合するものを選び、それを核として一首を作り上げる方法のあったことを確認した。

第二部では、貫之が晩年に醍醐天皇の命で編んだ『新撰和歌』について、そこに収められた歌が、詞書なしで過不足なく鑑賞され、作歌状況等に依存しない、それ自身で完結性を持つ、規範的典型的な性格が編者によって付与されたものであること。また、歌集全体としても、四季の歌では季節の順行を、恋の歌では恋の典型的なありようを示すべく歌が配列されるように、きわめて強い規範的意識のもとに編集されていること。そしてそこには天皇の仁徳を讃え、治世の平安を言祝ごうとする意図が読み取れることを述べた。

第三部では、『土佐日記』中に繰り返し記される亡児を悼む表現が、この時代においては公的な場で口にしがたいものであった一方で、当時の官人たちには、身近に体験しうるものとして共感を得やすいものであったことを指摘した。そして、そのような、官人たちの生活に根ざした悲痛な感情を一種の娯楽として文芸化した作品として柿本人麻呂の、「石見相聞歌」や「泣血哀慟歌」等くつろいだ宴席において披露された歌が、『土佐日記』に先行するものとして認められ、貫之もそれら作品を意識していたと見られることを述べた。

第四部では、本論文の根幹をなす研究として、『新撰和歌』の序及び全歌に訳注を施した。なお、全３６０首中、『古今集』と重複する約２８０首についても『新撰和歌』の文脈に置いて、同集の歌としての解釈を示した。また、『新撰和歌』が「対偶・相闘」という、他の歌集に見られぬ配列方法を取っていることに関して、それぞれの歌が対にされていることから読み取れることを併せ示した。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

水谷 隆氏より提出された学位申請論文「紀貫之の文芸に関する研究」は、日本における和歌、および日記文学の形成と発展の上に大きな貢献を果たした、平安時代前期の文学者 紀貫之を対象に選んで、その和歌と日記を精密に読み解き、創作の理念と方法とを明らかにすることを通して、和歌史研究のための新しい視点を提示しようとするものである。

従来の貫之研究においては、彼がその編纂を主導した『古今和歌集』を中心とすることが一般的であった。この論文で水谷氏が考察対象の中心に据えるのは、『新撰和歌』と『土佐日記』とである。『新撰和歌』は、『古今和歌集』撰進後、貫之晩年の、しかも貫之単独での撰集にかかるものであり、貫之の文芸を論ずる上で重要な作品であるが、本格的研究にはいまだ恵まれない。また、『土佐日記』も、日記文学の始発というにとどまらず、少なからず含まれる和歌の意義や機能について考究が俟たれるところが大きい。こうした見地より、氏が『新撰和歌』と『土佐日記』とを主たる研究対象に選ぶのは、貫之研究に新しい側面を開こうとするにあたって、まことに適切な判断だと考えられる。

この論文は、第一部(紀貫之の和歌創作の態度)、第二部(新撰和歌に関する研究)、第三部(土佐日記と新撰和歌からみる紀貫之の文芸観)、第四部(新撰和歌注釈稿)の四部から構成される。

まず、第一部では、「万葉集の利用の方法」(第一章)と「漢詩文表現利用の態度」(第二章)を考察する。貫之の歌の中に、従来の指摘をはるかに超える『万葉集』利用の徴証を見出したこと、その利用状況の検討を通して貫之の作歌活動の進展を跡づけたことなど、貫之研究の新たな側面を開く研究として高く評価することができる。貫之が繙閲したであろう『万葉集』の様態が明かされるならば、貫之研究にとどまらず、『万葉集』の本文・訓読の歴史と由来とが明かされることにもつながり、わが国の和歌史研究の闇部を解明する、大きな業績に昇華することが期待される。

第二章では、貫之における漢詩文の利用について、その実例を指摘し、どのように漢詩文の表現を歌に活かしているかを明らかにしている。和歌における漢詩文摂取については、これまで主として出典論の立場から研究が深められてきた。その成果を踏まえて、最近では、さらに表現論や主題論の立場からの研究へと向かう趨勢にあるごとくである。そうした趨勢の中で、焦点をしぼって、貫之の歌の表現や主題に踏み込もうとしたところが、この考察の手がらだと認められる。こうした地道な研究をさらに推進することによって、その摂取の具体的様相が明らかになり、比較文学的研究の発展に資することが期待される。

第二部(新撰和歌に関する研究)は、「新撰和歌の性格」(第一章)と「新撰和歌の編纂の意図」(第二章)を考察する。『新撰和歌』という撰集の性格を究明するために、まず、『新撰和歌』と先行の『古今和歌集』とにおいて重複する歌(約 280 首)を対象として、歌詞の相違がある場合、『新撰和歌』では、

①詞書にたよることなく、歌の歌詞のみで、歌の作意や情趣が十分に表現され、作品としての完成度が高められていること

②歌の表現(歌枕や歌語の用法、一首としての仕立てかたなど)について、貫之が求める歌の規範をより徹底させ、歌の典型にまで高めようとする意欲が見えること

を解明している。『古今和歌集』と『新撰和歌』と、同形、もしくは小異の歌がある場合、歌を置く場(文脈)が異なれば、その意味合いが変わる面が生じることを明らかにした功績は大きい。また、『新撰和歌』が詞書(作歌の時・場所、その折の事情、作者名などを記す)を捨てたことについて、そこには、歌の外側にまつわる情報にすがるのではなく、歌そのもの、あるいは配列される歌と歌が創り出す文脈によってのみ、歌を読み解き味わうべきだとする貫之の企図をこめたものと論じ、さらに収録歌数を一年の日数「三百六十首」(序)と定めて、「相闘」と「対偶」(序)という類例のない仕組みで配列―、歌々の響き合いを味わいながら読み進めることができる姿に仕上げられていることを明らかにした。いずれも、歌集解読の興趣を味到させる好論である。

その歌集としての性格がこのように把握される『新撰和歌』について、編纂の意図を探ろうとするのが第二部第二章である。この歌集が、春と秋、夏と冬との歌をつがえて、中国古典『禮記』月令に従う様相を示すのは、『新撰和歌』が「勅命」(醍醐天皇)により撰進を命ぜられたことを記す「序」に即応する証左と位置づけ、さらに戀と雑をつがえる部分では、人事の諸相が呈示され、先の季節の部分に加えて、ここにも天子に奏上する歌の典型・軌範が示されたものと論じている。歌集には、その構成への意図が顕著にこめられた、いわば"文(もん)"の部分と、そうした部分をつなぎ、なだらかに歌々をならべてゆく"地(ぢ)"の部分とがあることが知られているが、その"文"の部分を分析することをとおして、「序」に述べられた勅命への対処を貫之がいかに真摯に果たそうとしたのかを明らかにしたのは、文献学的研究の著しい成果だと評することができる。

第三部(土佐日記と新撰和歌からみる紀貫之の文芸観)は、「官人としての歌―人麻呂の私的感情を歌う表現―」(第一章)と「〈宮廷歌人〉の継承―土佐日記の態度と新撰和歌―」(第二章)の二つの部分から成る。『万葉集』を代表する歌人、柿本人麻呂は、天皇の行幸をはじめとする宮中の行事に奉仕する公的な歌と、「石見相聞歌」や「泣血哀慟歌」など、赴任した国での妻との別れや、妻の急逝をうたう、いわば私的な内容の歌とをのこしている。その後者、私的な歌の系譜につながるものとして貫之の『土佐日記』を位置づけ、また、人麻呂における公的な歌の継承が『古今和歌集』の撰進、『新撰和歌』の撰集において意図されたことにも意をとどめて、公的・私的両々相俟って往時の宮廷歌人と称される柿本人麻呂を、貫之には継承せんとする意図があったものかと論じている。万葉集と古今集以後との間に断層を見る研究界の情勢に対して、人麻呂から貫之へ継承と展開を認めようとする主張は、和歌史再構築を迫るものであり、意義が大きい。

第四部(新撰和歌注釈稿)は、貫之『新撰和歌』全巻、三百六十首すべてに注釈を施した、本邦初の

事業である。今後の貫之研究、『新撰和歌』研究のための基幹となる作業であり、研究史上の意義が大きい。

以上の所見により、この論文は、大阪市立大学 博士(文学)の称号を授与するに値する、極めてすぐれた研究成果であると認定される。